

新出の「下野国絵図」に関する基礎的研究

伊 藤 寿 和

一 はじめに

近世に作成された国絵図に関する研究は、この30年間に急速に進展し、多くの新たな知見と成果を上げてきた。その起点となったのは、1984年に刊行された川村博忠氏の『江戸幕府撰国絵図の研究』¹⁾であり、その後、葛川絵図研究会を引き継がれた小野寺淳氏を中心とする国絵図研究会が、1994年から本格的に活動を開始し、各地に残されている国絵図の現地調査を継続され、最新の成果を「国絵図ニュース」として毎年刊行して国絵図研究をリードされ、成果の一端としてすでに『国絵図の世界』²⁾が刊行されている。

幕府撰の国絵図の最新研究状況に関しては、小野寺氏³⁾や磯永和貴氏⁴⁾が簡潔にまとめられており、国絵図研究を常に牽引されてきた川村氏の最新研究も大著として刊行されており、小論では、国絵図研究の研究史や課題などについては、上記の諸論文に譲ることとしたい。

本稿においては、本年度（2014年）の前期に、授業の教材として新たに入手した新出の「下野国絵図」に関して、史料紹介も兼ねて、他の「下野国絵図」との比較・検討を行うこととしたい。

二 新出の「下野国絵図」の概要

2014年度の前期に、都内の古書店から大学の研究室に送られてきた古書目録の中に、わずか数センチ四方の小さな国絵図がカラー版にて掲載されていた。秋田県立図書館および併設されている秋田県公文書館を訪れ、かつて秋田藩が所蔵していた佐竹文庫に所蔵されている多くの国絵図の原本を閲覧・撮影していたため、一見して、貴重な「下野国絵図」とであると判断された。すぐに、当該の古書店にご連絡し、教材として購入することとした。

新たに入手した「下野国絵図」は、図1のように、天地（南北）約112cm×左右（東西）約79cmの大きさを有する、小型の手書きの国絵図である。秋田県公文書館での多くの国絵図の熟覧の経験から、近世初頭の寛永期の幕府巡検使の派遣に際して作成された貴重な「下野国絵図」の縮写図である可能性が高いように思われた。

現在では、裏打ちがなされているが、折り畳んだ際に本来は表となる面には、「下野国」「東山道八箇国之内」の外題が読み取れる。さらに、国絵図の内に向けて、四方から、東西南北の方位



図1 新出の『下野国絵図』（ゼミ生の大西真由さん撮影）

が、それぞれ記入されている。現状の「下野国絵図」は、東西・南北ともに八つ折りになされており、折り畳んだ状態では、手元において約28.5cm×20cmの大きさとなっている。

ただし、四方に大書された東西南北の文字のうち、南の文字の下方が切られて欠けており、写された当初の原本の大きさは、現状より数cm大きいものであったと考えられる。

かつて、秋田県公文書館において、佐竹本の「下野国絵図」を熟覧・撮影した折、色合いの異なる2枚の寛永10年（1633）の幕府巡検使の派遣に際して作成・提出が命じられた国絵図に関連すると思われる「下野国絵図」の縮写図を実見していた。1枚は、通常良く見受けられる山々が若草色に塗られた国絵図の写しであり、他の1枚は、少し青みがかった若草色に山々が塗られている国絵図であった。前者を春の萌え出る若草の色合いとすれば、後者は落ち着いた深緑の季節の山々の色合いと表現することもできようか。

なお、所蔵者の朱印を擦り消したと見受けられるか所も、1・2か所存在するが、判然とはせず、所蔵元は判明しない。

三 他の寛永期の「下野国絵図」について

秋田県公文書館の佐竹文庫には、山々が若草色に彩色された「日本六十余州国々切絵図」の内に含まれる「下野国絵図」の他に、青みがかった深緑に彩色された「東国絵図」と題された9か国・9枚の国絵図が所蔵されており、記載内容や彩色もほぼ同内容と判断されるが、異なる点も認められる。以下、管見の範囲において、他の機関に所蔵されている寛永期の「下野国絵図」の概要を述べた上で、新たに入手した「下野国絵図」の位置づけをおこなうこととしたい。

1) まず、秋田県立公文書館・佐竹文庫所蔵の「日本六十余州国々切絵図」から検討を始めた。他の東国の諸国と同様に、下野国に関しても、慶長国絵図および、その写しは残されていない。現時点での管見の範囲においては、全国一律に残されている最古の国絵図は、寛永10年（1633）に派遣された幕府の巡検使が作成・提出した諸国の国絵図の縮写図である。秋田の佐竹文庫にも寛永期に作成されたと想定される「日本六十余州国々切絵図」と題された国絵図の一群が所蔵されている。この絵図群には、全国に及ぶ旧68か国それぞれ1枚ずつ（備前国は2枚）が残されている。

伝えられている佐竹文庫の寛永期の国絵図は縮写図であり、後に作成された正保国絵図や元禄・天保の国絵図のように、当時のすべての街道や宿場町、また、村々をすべて描いている訳ではないが、近世初頭の寛永年間における下野国内の主な街道と宿場町などが描かれており、かつて、『国絵図の世界』と『鹿沼市史』の地理編⁵⁾において筆者がその概要を紹介したが、より詳細な検討が望まれる。

この佐竹文庫本の寛永期に作成・提出された「下野国絵図」の縮写図は、近世初頭の下野国の地域史の空白を埋める貴重な国絵図であることは多言を要さない。当該の「下野国絵図」の大きさは、天地（南北）およそ95cm、左右（東西）およそ85cmである。最も南に位置する小山から宇都宮の城下町を経て日光へ至る日光街道や、宇都宮から北に延びる奥州街道などの主な街道が朱線で引かれている。

下野国内の主要に街道に沿う大名の居城は、図2のように、四角の中に白丸を抜く記号で描か

れている。南から街道に沿って、壬生城・宇都宮城・烏山城・大田原城が明確に描かれている。さらに、「佐野古城」をはじめとして、近世の初頭に城割りされて廃城となった13の「古城」も描かれている。描かれている主要な「古城」は、小山城・皆川城・茂木城・千本城などである。

また、この国絵図の特徴の一つは、近世の初期に建設・維持されていた將軍の日光社参用の「御殿」と「御茶屋」が大きな朱の円として描かれていることである。通説では、將軍の宿泊用に建設された規模の大きなものが御殿であり、休息や昼食のために整備された小規模なものが御茶屋であると、これまでは理解されてきた。けれども、近年の御殿と御茶屋の発掘調査の成果⁶⁾によれば、御茶屋の規模も御殿に劣る者ではないことが明らかになってきた。

『徳川実紀』では、両者ともに「御旅館」と記載されている事例もあり、御殿と御茶屋の実態の差に関しては、全面的な再検討が必要であると判断されよう。

この佐竹本の「下野国絵図」には、小山の「御殿」・鹿沼の「御茶屋」・大沢の「御茶や」・今市の「御茶屋」の4か所が描かれている。徳川家光による寛永13年(1636)の日光東照宮の大改造の完成以前、すでに、將軍の日光社参のために下野国内に複数の「御殿」と「御茶屋」が建設・維持されていたことが判明する点からも、寛永期の国絵図の価値は高い。

2) 次いで、山口県立文書館の毛利文庫にも、「日本図」と題された寛永期の

巡検使の派遣に関連する縮写図が68枚所蔵されている。しかし、上記の佐竹本の「下野国絵図」に比べれば、粗略な縮写図であることは明らかである。毛利本に記載された文字をはじめとして、山並みや河川の線などが荒く引かれており、周囲の山並みにも彩色がなされていない。

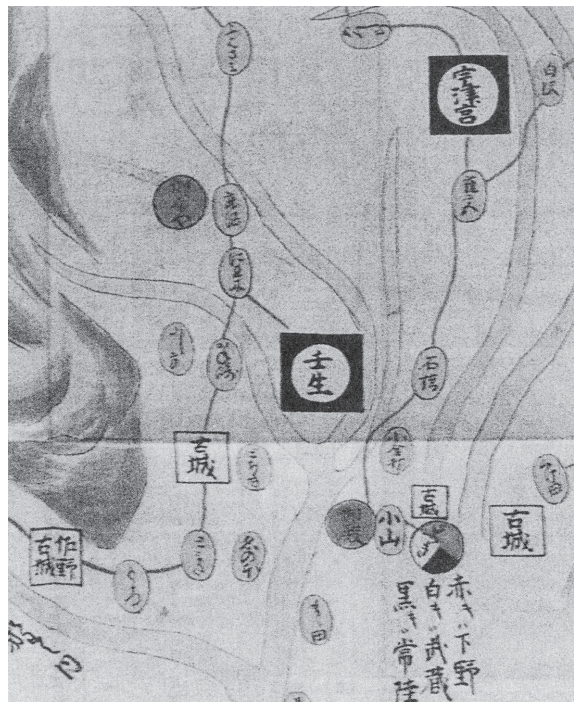


図2 佐竹A本の「下野国絵図」(注5より引用)

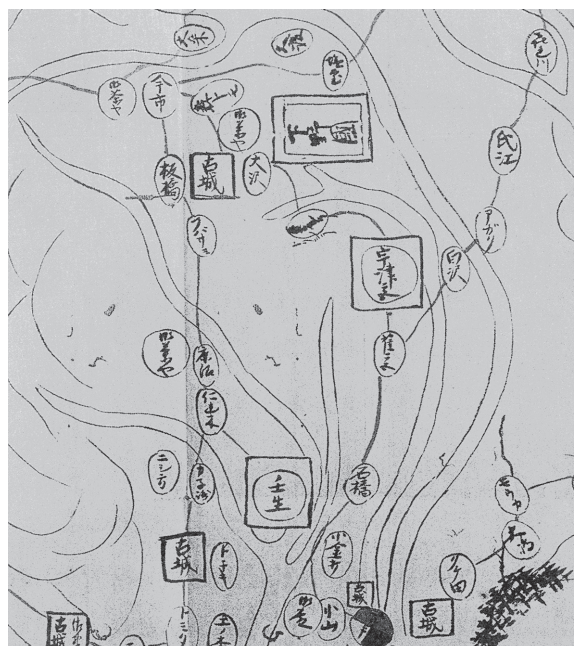


図3 毛利本「下野国絵図」(注5より引用)

確かに、佐竹本に比べれば、粗略な縮写図であることは否めないが、描かれている主な街道筋や御殿・御茶屋なども、大きな差異はないと判断されよう。ただし、丁寧に描かれている佐竹本では、基本的には漢字と平仮名で記載されているが、図3のように、毛利本ではカタカナで記された地名が多く散見される。佐竹本と毛利本との間に、決定的に差異は存在しておらず、共通の原図が存在している可能性が高いと想定されよう。

3) 岡山大学附属図書館の池田家文庫にも、寛永期の「日本六十余図」66枚が所蔵され、すでに刊行されている⁷⁾。池田本の国絵図に描かれている内容は、丁寧に描かれている佐竹本とほぼ同じであるが、余白に「下野国九郡」の記載をはじめとして、都賀郡などの各郡名が列記され、下野の石高である「高四十八万四千石」の文字が記載されている。

そして、図4のように、秋田の佐竹本や山口の毛利本には付されていない薄紙の付箋が居城に貼られている。その付箋には、壬生城に「式万五千石 三浦志摩守」、宇都宮城に「拾五万石 松平下総守」、烏山城に「(石高欠) 板倉内膳正」、大田原城に「壹万貳千石 大田原山城守」の文字が記載されている。これら4枚の付箋に記された城主の在任期間が揃う時期は、寛文11年(1671)であり、この年に薄紙の付箋が後に貼られたものと想定されよう。

4) 秋田県公文書館の佐竹文庫には、前述の「日本六十余州国々切絵図」の他に、「下野国九郡絵図」と題された9枚の国絵図が所蔵されている。描かれている内容は、図5のように、寛永期の「日本六十余州国々切絵図」とほぼ同じであると判断される。

両者の国絵図の相違点は、「下野国九郡絵図」の下野国絵図の余白には、郡の数と郡名、一国

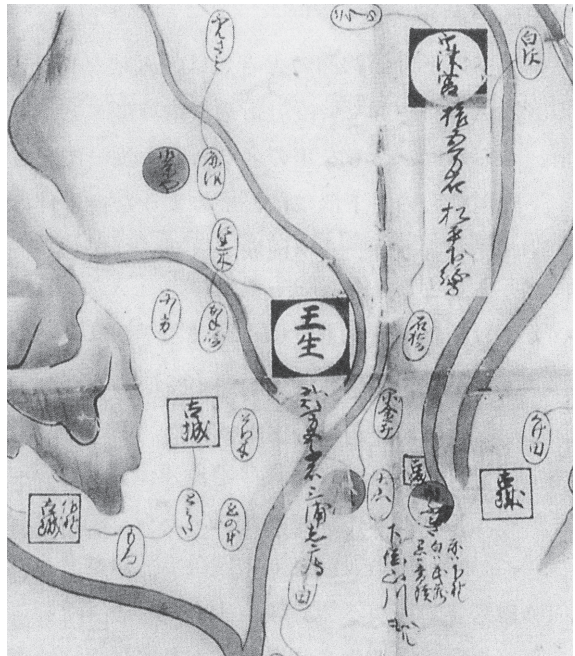


図4 池田本「下野国絵図」(注5より引用)

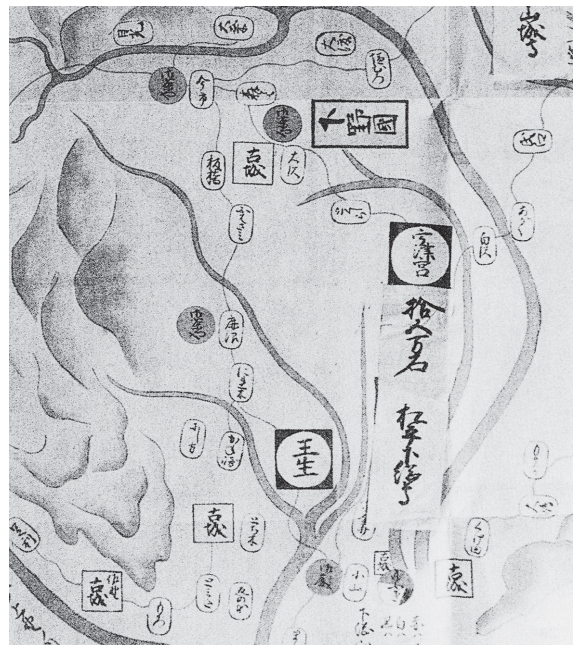


図5 佐竹B本の「東国絵図」の下野国絵図
(注5より引用)

の石高（46万4千石）が記されて、池田本と同様に、居城には城主名と知行高を記す薄紙の付箋が貼られている。この付箋の有無と山々に塗られた色彩が最も大きな違いと認められる。

ただし、「下野九郡」と明記されながらも、足利・梁田・安蘇・都賀・那須・寒川・河内・芳賀・塩屋・真壁の十郡が記載されており、末尾の真壁郡には小さく「異本ニ」との小書きの付記がなされており、本来は常陸国に属する真壁郡の郡名が混入したものと考えられよう。

居城に貼られた同じく薄紙の付箋と郡名などの記載を有する池田本と佐竹本の「下野国九郡絵図」の中の下野国絵図は、同じく薄紙の付箋を有しながら、池田本の山並みが若草色に彩色されているのに対して、後者の佐竹本の山並みには、薄い青色を含んだ若草色に彩色されており、一見した時の印象には差異が認められる。

四 新出の「下野国絵図」について

次に、佐竹文庫所蔵の寛永10年（1633）の幕府巡検使に提出された国絵図の縮写図であると想定される「日本六十余州国々切絵図」中の「下野国絵図」（以下、佐竹A本と表記する）と、「下野国九郡絵図」中の「下野国絵図」（以下、佐竹B本と表記する）と、新出の「下野国絵図」（以下、新出本と表記する）の三者に比較・検討を加えることとしたい。

（1）3枚の寛永期の「下野国絵図」の紙幅

まず、各図の大きさは、佐竹A本が81×95cm、佐竹B本が84×107cm、新出本は79cm×112cmであり、三者の間にさほど大きな差異は認められない。

（2）彩色

佐竹A本の山並みは全体的に明るい若草色に彩色されており、佐竹B本は落ち着いた少し青味がかった若草色の彩色がなされており、一見した時の印象に違いが認められる。新出本の彩色は、少し青味がかった若草色であり、佐竹B本に近い彩色がなされている。

次いで、佐竹A本では朱線で引かれた主な街道に沿う宿場町が楕円形に描かれ、黄色に塗られ、その上から宿場町の名が墨書されている。一方、佐竹B本では楕円形に描かれた各宿場町に黄色の彩色はなされていない。新出本は彩色がなされておらず、佐竹B本と同じである。

彩色の点から見た場合、新出本の彩色は、山並み・宿場町の彩色共に、佐竹B本に使いと判断されよう。

（3）主要な街道と宿場町

佐竹A本では、佐竹B本と異なり、最南端に描かれている「乃き」から「まま田」を経て、「小山」に至る間の日光街道の朱線が引かれていない。新出本では、佐竹B本と同様に、この間の日光街道の朱線は引かれているが、街道に沿う一里塚の黒点は付されていない。

次いで、日光街道の朱線が引かれている佐竹B本と新出本においても、図6のように、日光街道が「乃き」の宿場町を通らずに、東側を廻り込むように朱線が引かれている。また、佐竹A本・佐竹B本・新出本の三者すべてにおいて、「小山」から宇都宮の城下町に向かうに際して、「乃き」と同様に、「小金井」を通らずに、宿の西側を通り抜けるように朱線が引かれている。

さらに、より重要であると判断されるのは、宇都宮の城下町から北に延びる奥州街道が、宇都宮の手前である「雀宮」から宇都宮の城下町を通らずに、北東に延びる奥州街道が引かれており、

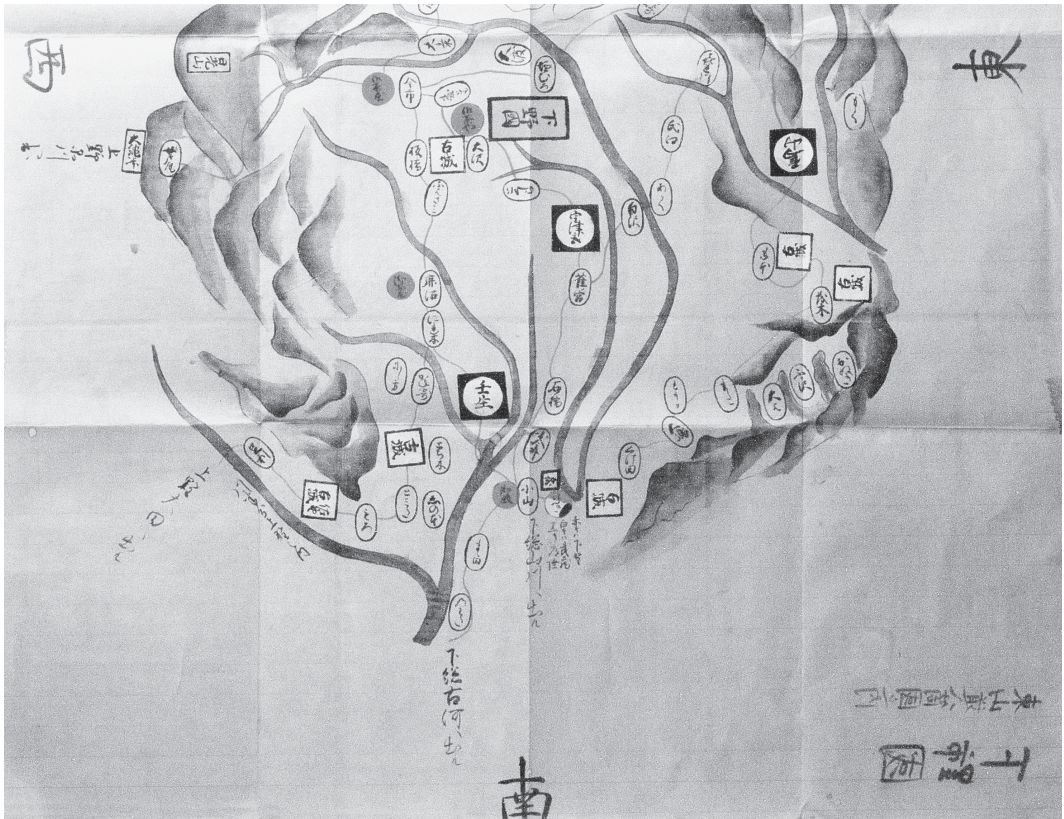


図6 新出の『下野国絵図』（ゼミ生の大西真由さん撮影）

その奥州街道に沿って、「白沢」や「あくつ」などの各宿場町が描かれている点は共通している。

これら3枚の国絵図は、寛永期の縮写図ではあるが、後に宇都宮の城下町が整備・拡張されるに従い、宇都宮の城下町に引き込まれ、付け替えられて整備される通説の日光街道や奥州街道が確定する以前の、中世以来の古い街道筋が描かれている可能性もあり、より慎重な再検討が必要であると考えられる。

なお、佐竹B本で描かれている重要な「日光」が、佐竹A本では描かれておらず、新出本でも「下野国絵図」で描かれるべき重要な要素である「日光」が描かれてはいない。また、佐竹A本では小山以南の日光街道の朱線が引かれていないが、佐竹B本では、小山以南にも日光街道の朱線が引かれ、「下総古河へ出ル」の注記が付されており、新出本でも小山以南に日光街道の朱線が引かれ、「下総古河へ出ル」と注記されている。さらに、佐竹B本と新出本の小山と足尾には、それぞれ、「下総山川へ出ル」「上州品川へ出ル」の注記が付されている。

(4) 山と峠

下野国を取り巻く周囲には、西から北・東へと、「大縄峠」「日光山」「高原山」「なす山」「矢みそ山峠」の5か所の代表的な山や峠の名前が小さな黒枠の中に記載されている。その場合、佐竹A本は朱の四角で囲まれた中に墨書されており、佐竹B本では茶色の四角で囲まれた中に墨書されている。他方、新出本では、両本とも異なり、白色に塗られた四角の中に墨書されている。

(5) 御殿と御茶屋

寛永期の「下野国絵図」には、将軍の日光社参用に建設・維持されていた御殿と御茶屋が描かれている。描かれているのは、御殿は小山の御殿のみであり、宇都宮城内に建設された御殿と日光山内に建設されていた御殿などは描かれていない。また、今市・大沢・鹿沼の3か所に「御茶や」が、佐竹A本・佐竹B本・新出本にも描かれており、差異は認められない。

(6) 古城の記載方位

各国絵図の中には、すでに廃城となされていた「佐野古城」をはじめとして、13の古城が描かれている。佐竹A本では、主に鬼怒川より南西に位置する5つの古城は南から読み取れるように記載され、国の東に位置する茂木地域の2つの古城は東から、そして、北部の那須地域の6つの古城は北から読み取れるように記載されている。これに対して、佐竹B本では、13の古城すべてが南から読み取れるように統一的に記載されている。新出本では、那須地域の古城は佐竹A本と同様にすべて北から記載され、東部の2つの古城も東から記載されている。ただし、南部に位置する4つの古城は西から読み取れるように記載されており、記載方法が同一ではないことには、十分な留意が必要である。

大名が居城する城も、佐竹B本では、「壬生」「宇都宮」「烏山」「大田原」の各城は南から読み取れるように統一的に記載されており、佐竹A本と新出本では、南部の「壬生」と「宇都宮」は南から、北部の「烏山」と「大田原」は北から読み取れるように記載されている。

(7) 木版の存在

新出本の「下野国絵図」は、全て手書きされているわけではないことには、留意が必要である。まず、居城は約3.5cm角、古城は約2.5cm角の木版の枠が使用されており、各宿場町も長径約2.5cmの楕円形の、御殿と御茶屋も約2cmの円形の木版の枠が使用されており、統一の規格をもって写されていることが判明する。このことは、個人が手書きで各国の国絵図を写したのではなく、佐竹家や池田家と同様に、ある藩や有力者が全国の寛永期の国絵図の縮写図を、同一の規格で作成した可能性も想定されよう。

五 おわりに

前期に教材用として新たに入手した時点においては、かつて秋田公文書館において熟覧・撮影していた佐竹A本と佐竹B本のどちらかに近い縮写図であろうと想定していた。けれども、上記のように、それぞれの下野国絵図に描かれている要素を、ひとつひとつ比較・検討した結果、新出本が単純に佐竹A本か佐竹B本のどちらか一方に近い原本を写した縮写図ではないことが判明してきた。以下、すでに刊行されている岡山の池田家文庫本との4枚の下野国絵図の要素ごとにまとめた一覧表を提示して、まとめて代えたい。

表1 寛永期の「下野国絵図」の要素ごとの異同

	山並みの彩色	宿場町の枠内	小山以南の街道	日光の記載	山名の枠内	古城記載方位	御殿・御茶屋	附箋の有無
佐竹A本	若草色	黄色	なし	なし	朱色	多方	あり	なし
佐竹B本	青水色	白抜き	あり	あり	茶色	南から	あり	あり
新出本	青水色	白抜き	あり	なし	白色	多方	あり	なし
池田本	若草色	白抜き	あり	あり	朱色	南から	あり	あり

このように、管見の範囲において、熟覧し得た寛永10年の幕府巡検使に提出されたと想定される4枚の「下野国絵図」の縮写図について、描かれている主要要素ごとに比較・検討した結果、新たに入手した新出本の「下野国絵図」は、佐竹A本に類似している点が3点、佐竹B本に類似している点が4点あり、どちらか一方の原図を写したとの想定は控えねばならない。

また、参考として一覧表の下に付した岡山の池田本も、佐竹A本との類似点が4点、佐竹B本との類似点が6点であり、こちらも、どちらか一方の原図を写したもののとの想定も控えねばならない。他の諸国の国絵図の事例も含めて、寛永期の国絵図に関する本格的な研究⁸⁾は、未だスタートラインにあると判断されよう。

確かに、佐竹B本と池田本は、ともに居城に城主名と石高を記した薄紙の付箋を貼り、余白に「下野九郡」の記載と、本来は常陸国に属する「真壁郡 異本二」の注記、「都賀」に付された「トカ」のルビも共通している。両本に共通する原本の存在が想定されよう。

今後、さらに詳細かつ具体的な研究を深め、各国において、近世初頭の地域史研究に活用したいと念じている。

これまでに、寛永期の国絵図の縮写図の存在がまとまって確認されているのは、管見の範囲では、上記の佐竹A・B本・毛利本・池田本の他には、未見であるが、土佐の山内家本の5セットのみである。大別すれば、居城に薄紙の付箋のない甲群（佐竹A本・毛利本）と、薄紙の付箋を有する乙群（佐竹B本・池田本）に分けられるが、今回、両群の要素が混在した国絵図の新出により、より慎重かつ詳細な伝写系統の復原と検討が必要となった。

今後、正保国絵図など他の時期の国絵図と同様に、寛永期の国絵図の縮写図の写しも、さらに見つかる可能性が高いと想定される。

筆者は、他に、教材用として、「越後国絵図」・「周防国絵図」・「米沢領絵図」を入手しているが、それらの国絵図に関しても、稿を改めて紹介・検討することとしたい。

付記 秋田県公文書館をはじめとして、関係の諸機関の皆様には、大変お世話になりました。記して、感謝申し上げます。

注および文献

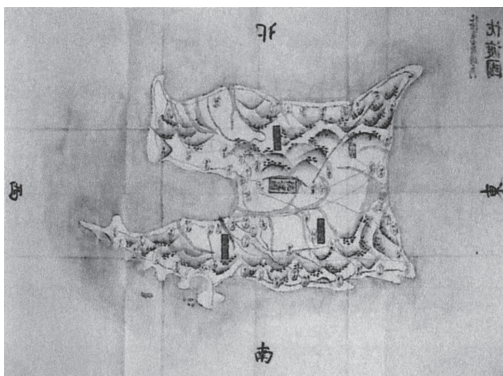
- 1) 川村博忠(1984)『江戸幕府撰国絵図の研究』、古今書院。
- 2) 国絵図研究会編(2005)『国絵図の世界』、柏書房。
- 3) 小野寺 淳(2008)「近世国絵図史料論の課題 ―国絵図研究会の活動を通して―」、歴史学研究、842号。

- 4) 磯永和貴 (2010)「国絵図研究の課題」、歴史地理学、52-1号。
- 5) 伊藤寿和 (2003)「江戸時代の景観と地域構造」『鹿沼市史』地理編。
- 6) 「考古学ジャーナル」651号 (2014) には、千葉の御茶屋御殿をはじめ、府中御殿・中原御殿・青戸御殿・品川御殿などに関する最新成果が報告されている。
- 7) 川村博忠編 (2002)『寛永十年巡検使国絵図 日本六十余州図』、柏書房。
- 8) 川村博忠 (1995)「日本六十八州縮写国絵図」、歴史地理学、37-5号。
 白井哲哉 (1998)「日本六十余州国々切絵図の地域史的考察 ―下総国絵図を事例に一」、駿台史学、104号。
 前田正明 (2000)「諸藩で書写された『諸国国絵図』について ―川村博忠と黒田日出男の国絵図研究に対する検討―」、和歌山県立博物館研究紀要、5号。

付記 本稿完成後、都内の古書店の目録に、寛永期の国絵図の縮写図の写しと想定される2枚の国絵図が掲載された。「佐渡国絵図」と「越後国絵図」であり、それぞれに、「佐渡国」「越後国」の外題の文字の横に、小さく「北陸道七箇国之内」と付記されている。本稿で論じた「下野国絵図」との類似点と相違点も認められるが、教材として入手するご縁には恵まれなかった。

小さな写真版であり、残念ながら詳細な比較・検討はなしえない。ただし、両国絵図の四方に書かれた東西南北の文字の特徴から、この両絵図の筆者は、本稿で検討を加えた「下野国絵図」の筆者と同じ人物の手になる可能性が高いと想定される。

なお、原本の大きさは、目録によれば、「佐渡国絵図」が79×113cm・「越後国絵図」が80×113cmである。下は当該の目録に掲載された両国の国絵図である。



「佐渡国絵図」



「越後国絵図」